

漆をとる。一人が四百本うけもって、一日に百本漆をかけば、毎日仕事ができるあんばいや。「どうやって集めたの。」

「朴の木でつくったチャンポにへらですくいとって入れる。高い所は、はしごをさしてとった。盛りには一日八百匁もとれた。一年で二十貫ほどとった。」

「儲かったんか。」



「まあまあやった。外国から安い漆が入らんようになったころは儲かった。損した話もきいた。帰りの宿でバクチうって、すっからかんになったとか、集めた漆を輸送の途中で取られてしもたとか。」

「いつ頃から始まったの。」

うるしおきさんは  
鳥の性を得たか  
朝の早いから木のそらに

「江戸時代らしい。昭和三十年ころはほんの少しになって、

そのうち止んでしもた。」

「昔の人は苦勞したんやね。」

かわいい子をおき  
妻をもおいて  
行くは河和田のうるしおき

「そうや。みんな辛抱強かったんや。農家の隅っこ借りて自炊した。おかずはちよつとや。雨降りには仕事ができん。晴れると朝はつす暗いうちから出かけて、暑い日中だけ休んで、日が暮れて戻った。」

「ああ、言い忘れるとこやった。漆かきに出かけたのは、河和田や服間の人が全国で一番多かった。粟田部で作る漆かきの鎌が全国一いい品で、そこでしか作らなんだのと、米作りのわりとひまな夏場が漆かきの時期やったからの。」

## ② 余加の草分け

北中、寺中、清水町あたりをうんと昔は余加というたそうな。余加の開祖は有平という人だ。この人は実母に死別れて、京の都から近衛中将隆澄卿と一緒にこちらに来て、この地に住みついたとか。



その時、付き添ってきた人が六人あって、それが北中の草分け六軒となった。六軒のうち五軒はいまも続いている家で、ながづかの仁兵衛さん、上出では五兵衛さん、善右衛門どん、おつかまちでは徳右衛門どんと中出の卯右衛門どんらや。

どの家も格式たかく、庭や家構えに昔をしのばせるものがある。善右衛門どんには朝倉家から嫁に来たときの銀の銚子や足駄があったし、卯右衛門どんには、昔殿さまからもらった盃があって、酒を注ぐとパツと桜の花が浮き出たもんや。

清水町では堂の下の草分けは明治時代に北海道に移住した利左衛門さんや。

寺中の草分けの新左衛門どんは、朝倉氏とは縁続きの古い家での。朝倉から嫁入りするとき、花嫁はお供に二十人をつれて、金谷坂を駕籠にのってやってきたと。その時持ってきた道具も長いことあったんやけど、江戸時代に火事に遭うて燃えてしもたんやと。

義景のころには、新左衛門どんの娘がお館にあがって、義景の姫君の乳母をしてたんやと。一

乗谷に敵の信長軍が近づいてきた時、義景は部下にいうた。

「この二人の娘は無事に落ちのびさせてやりたい。姉は知ってのとおり、教如上人にとつぐ約束だった。なんとかして大阪の石山本願寺におくりとどけてほしい。」との。

この時新左衛門どんの娘も女ながら命がけで大阪まで姉姫のお供をしたんやと。そして数年間はお側に仕えたんで、帰国するとき本願寺から三つのご褒美をもらうた。親鸞上人の書かれた十字の名号と香炉と短刀や。それから近くの憶念寺に入って、朝倉氏の菩提をとむらった。

その縁で名号は憶念寺に寄進した。短刀はなぜか床下にうめられて時がすぎ、みつかった時にはさびてボロボロ、今は言い伝えと香炉だけが残っている。

